

わたしたちの 想い その1

2017年7月、国連加盟国の3分の2にあたる122カ国の賛成で採択された核兵器禁止条約。

出席さえも拒んだ日本代表の席には、大きな折り鶴が飾られていました。そのテレビ映像を見たときの悲しさと悔しさを忘れることができません。世界の平和は核のコントロールで実現するものではありません。唯一の被爆国である日本は、被爆者の方々と一緒に核兵器廃絶の願いを世界に届け、実現する先頭に立つべきです。

(事務局 泊共子)

1980年代の初め、当時は米ソの核軍拡競争の真っ只中で、今にも核戦争が起こりそうな情勢でした。国連の週末時計が「核戦争…秒前」まで進みました。当時は「草の根反核運動」が全国でも高揚期を迎えていました。東京での核兵器をなくせの大集会に職場の労働組合から10人余りの自転車部隊で参加しました。また、原水禁世界大会には「バイク・フォー・ピース」と銘打ち5日間かけて銀輪部隊を派遣しました。途中、神戸、姫路、福山などで署名もやりました。真夏の中、自転車で核兵器をなくせと訴え、8月5日に広島に到着した時の感動がよみがえります。あれから40年。世界の草の根の運動のつみ重ねがあって今回の核兵器禁止条約が実ったのだと思いますが、それにしても「核兵器なんて誰もいらぬはずなのに、なぜ条約ができるまでこんなに時間がかかるのだろう」と思ってしまいます。40年前の若さや勢いはありませんが、情熱だけは失わず、微力でも役に立つと信じて「6の日」行動に参加したいと思います。(八尾平和委員会 奥村正憲)

子どもの頃映画館で見たニュース映像。焼津港のマグロに放射能測定をする「ガアーガアー」という測定音が今でも耳に残っています。「次の雨には当たったらアカンで」は母の注意。忘れていて、風呂場で頭を強制的にあらわれたことも。地上で核実験が行われた頃の話です。1955年、広島で第一回原水爆禁止世界大会が開かれ、峠三吉が「人間をかえせ」と訴えた核兵器の非人道性は、やがて国際社会で7割を越す国が賛同し、核兵器禁止条約に結実しました。

唯一の被爆国でありながら核抑止にすぎるわが政府。国民に本当に幸せと平和をもたらすことなのか。ますます世界から取り残されてしまう。

(八尾原水協 木村薫)

日本は、安全保障にとって米国の核兵器は不可欠と考え、条約への加入を拒否しています。しかし、世界で唯一の被爆国である日本が、核兵器を前提とする安全保障の正当性を主張することがあってよいのでしょうか。他国の核を脅威と思うのなら、核兵器廃絶へ向けた議論に積極的に参加すべきです。

(弁護士 加莉匠)

核兵器禁止条約は、戦争のない社会を作り、未来へと繋いでいくという、未来の子どもたちに対する『約束』だと思います。私たちが平和への『約束』を果たすためには、私たちの父母・祖父母が経験した戦争の記憶を風化させず、絶えず語り継ぎ、条約への批准を政府へと訴え続けるしかありません。(弁護士 藤井恭子)

唯一の被爆国の日本が傷みも苦しみも味わったにもかかわらず未だに「核兵器禁止条約」署名も批准もしないことは、日本国民として情けないし口惜しい限りです。この現実を多くの人に知ってもらうことが大事だと思います。

(東大阪平和委員会・女性)